

[資料]

## 地域に居住する独居高齢者の現状と課題に関する 文献レビュー

角 マリ子 多久島 寛 孝

Literature review on the actual conditions and issues of elderly people living alone  
in the community

Mariko SUMI, Hirotaka TAKUSHIMA

### 和文抄録

本研究は、地域に居住する独居高齢者について報告されている28件の文献を概観し、研究の動向、現状と課題を整理して、今後の研究の方向性、地域に居住する独居高齢者の支援についての示唆を得ることを目的にした。独居高齢者が住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けていくための支援のあり方について、以下の結論を得た。

1. 公的サービスや地域での自主グループ活動等との接点が少ない独居高齢者に焦点をあてて現状を明らかにする
2. 運動や地域活動に参加が難しい独居高齢者の把握とともに、独居高齢者の外出や社会活動、閉じこもり等の外界とのつながりのありようや日常生活能力について実態を把握する
3. 地域に居住する男性独居高齢者の把握とともに、困りごと等を表出できる関係づくりを行う
4. 認知症をもつ独居高齢者を介護する子、あるいは介護者の負担軽減にむけて取り組む

キーワード：地域在住高齢者、地域住民、独居高齢者、高齢単身世帯

### I 緒言

我が国の65歳以上の独居高齢者の増加は顕著である。2022年の報告によると、65歳以上の者のいる世帯は2747万4000世帯であり、そのうち夫婦のみの世帯882万1000世帯（65歳以上の者のいる世帯の32.1%）、次いで単身世帯が873万世帯（同31.8%）である。65歳以上の者のいる世帯の世帯構造の年次推移をみても、高齢者単身世帯については、年々増加しており、1986年は13.1%であったが、2022年には31.8%であった<sup>1)</sup>。

1世帯あたりの人数が少なくなると、普段支障なく生活できているものの、病気や行事等が生じると対処が困難であり<sup>2)</sup>、独居高齢者は日常の様々な悩み事について身近に相談できる相手がいないとされ

る<sup>3)</sup>。

本研究では、地域に居住する独居高齢者に関する研究の動向を整理するとともに、これまでの研究で得られた知見を基に、独居高齢者の現状と課題を分析し、それらから独居高齢者を支援するためのあり方を検討する。

### II 方法

#### 1. 文献の選定

文献の特定には、医学中央雑誌 Web 版を用いた。検索キーワードは、「地域在住高齢者 and 独居」（検索式1）、「地域在住高齢者 and 単身世帯」（検索式2）、「地域居住高齢者 and 独居」（検索式3）、「地域居住高齢者 and 単身世帯」（検索式4）、「地域住

民 and 高齢者 and 独居」(検索式5), 「地域住民 and 高齢者 and 単身世帯」(検索式6), 「高齢単身世帯」(検索式7)とし, 2022年までに出版された文献を検索した。その結果, 検索式1では59件, 検索式2では38件, 検索式3では2件, 検索式4では2件, 検索式5では79件, 検索式6では64件, 検索式7では17件, 計261件であった。

そのうち, 重複論文を除外した129文献を対象に, 文献の組み入れ基準と除外基準をもとに精読し, 適格性の判断を行った。文献の適格性を判断する組み入れ基準と除外基準は, 本研究の目的, すなわち, 地域に居住する独居高齢者の現状と課題を明らかにすることから設定した。組み入れ基準は, 1) 研究の種類: 新奇性と信頼性のある原著論文である, 2) 研究参加者の特性: 地域で単身生活する65歳以上の高齢者, 3) 研究結果の内容: 治療法・尺度の評価や医療費等の評価をしていない, とした。文献

の除外基準は, 1) 日本国外を研究対象地域にしている, 2) 地域に居住する高齢者の支援者等を研究対象にしている, とした(以上の選定過程は, 図1に示す)。その結果, 28件の文献<sup>4)~31)</sup>を本研究の分析対象として採択した(表1)。

なお, 文献の選定については, 牧本<sup>32)</sup>, 佐伯ら<sup>33)</sup>の手法を参考に行った。

## 2. データ分析

データの分析は, まず対象文献における発行年, 研究デザイン, 対象者を整理した。また, 対象文献から地域に居住する独居高齢者に関する現状と課題についての記述内容を抜き出し, コードとした。次に, 現状と課題それぞれについて, コードの意味内容の類似性と相違性に基いて分類・整理し, 類似するコードの意味内容を表すサブカテゴリを表した。同様に, サブカテゴリの意味内容の類似性と相違性に基いて分類・整理し, 類似するサブカテゴリの

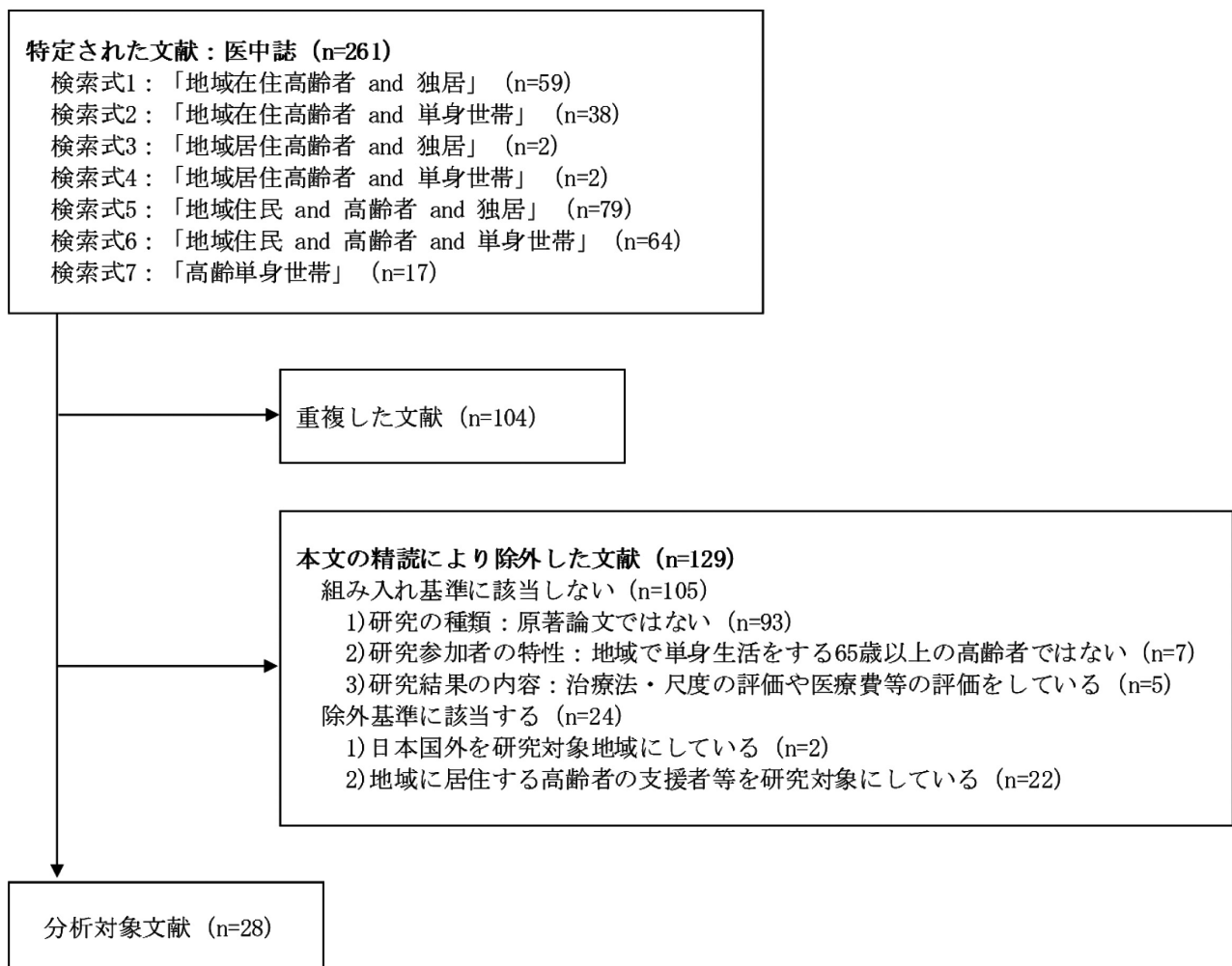


図1 文献の選定過程

表1 対象文献一覧

論文番号	著者(発表年)	タイトル	研究デザイン	対象者
1	藤川 他 (2021) <sup>4)</sup>	中山間地域の消滅危惧集落における1人暮らし男性後期高齢者を支える心理・社会的要因	質的研究	ある地域に居住する75歳以上の独居高齢者
2	佐々木, 白井 (2021) <sup>5)</sup>	地域在住高齢者の社会活動とJST版活動能力指標の関連	量的研究／横断研究	ある地域のシルバー人材センターに登録する65歳以上高齢者
3	和田 他 (2021) <sup>6)</sup>	地域在住高齢者における社会的フレイルとうつ傾向との関連	量的研究／横断研究	ある地域に居住する65歳以上高齢者
4	渡邊 他 (2021) <sup>7)</sup>	地域在住高齢者の社会的フレイルの有無と身体機能の特徴	量的研究／横断研究	地方都市に居住する高齢者
5	山下 他 (2020) <sup>8)</sup>	地域在住高齢者の世帯構造別にみた心身機能および生活機能の特徴	量的研究／横断研究	ある地域の認知症予防推進事業に参加する地域在住高齢者
6	田中 他 (2020) <sup>9)</sup>	中山間地域における社会的孤立高齢者の人付き合いの選択の違いによる新たな類型化 コレスポネンス分析による特徴の検討	量的研究／横断研究	中山間地域に居住する65歳以上高齢者
7	尚 他 (2020) <sup>10)</sup>	地域在住女性高齢者における現在回数20本未満の関連要因 名古屋身体操教室参加者における調査	量的研究／横断研究	体操教室に参加する都市在住の65歳以上女性高齢者
8	木原 他 (2019) <sup>11)</sup>	Barriers to participation in a physical activity program for the elderly in one area of Hokkaido, Japan	量的研究／横断研究	ある地域に居住する70歳～79歳の高齢者
9	藤井 他 (2019) <sup>12)</sup>	地域在住高齢者における運動実践と抑うつとの関連性 世帯構成および運動仲間の有無に着目した検討	量的研究／横断研究	地方都市在住の要介護認定を受けていない高齢者
10	丸田 他 (2019) <sup>13)</sup>	地域在住高齢者における心の理論課題成績と社会参加との関連	量的研究／横断研究	地方都市在住の独居高齢者
11	Takeuchi et al.(2018) <sup>14)</sup>	Living alone is associated with an increased risk of institutionalization in older men : A follow-up study in Hamanaka Town of Hokkaido, Japan	量的研究／横断研究	地方都市在住の高齢者
12	生天目 他 (2018) <sup>15)</sup>	配偶者と死別したひとり暮らしの男性高齢者が食を通じた交流へ参加したきっかけと継続していくプロセス	質的研究	配偶者と死別後、自主グループ活動に参加している男性独居高齢者
13	中村 他 (2018) <sup>16)</sup>	地域在住高齢者が転出に至る要因の研究 望まない転出を予防するために	量的研究／横断研究	全国24市町村における65歳以上の要介護認定をうけていない地域在住高齢者
14	橋本 他 (2017) <sup>17)</sup>	都市部高齢者の不眠症状とその関連因子	量的研究／横断研究	大都市居住の65～84歳の高齢者
15	安孫子 他 (2017) <sup>18)</sup>	自主グループ活動に参加する独居高齢者の継続参加への意味づけ	質的研究	地方都市の自主グループ活動に参加する独居高齢者
16	藤井 他 (2017) <sup>19)</sup>	独居高齢者における地域活動への参加と抑うつとの関連性	量的研究／横断研究	地方都市在住の要介護認定を受けていない65歳以上の高齢者
17	Toyosato et al.(2016) <sup>20)</sup>	The moderating effect of spiritual well-being on the association between depressive state and living arrangement in the elderly in rural Okinawa	量的研究／横断研究	地方都市に居住する高齢者
18	杉浦, 早川 他(2015) <sup>21)</sup>	高齢者の日常生活状況に関与する各種要因の解析(第I報) 老研式活動能力指標およびうつ傾向評価に関与する因子の抽出	量的研究／横断研究	中山間地域に居住する65歳以上の高齢者
19	大嶋, 沖中 (2015) <sup>22)</sup>	独居男性高齢者2事例の自主グループ活動継続理由 健康意識の高まりと自分の居場所があること	質的研究	ある地域で自主グループ活動に参加している独居男性高齢者
20	久保 他 (2014) <sup>23)</sup>	独居高齢者と非独居高齢者の特徴に関する大規模調査	量的研究／横断研究	ある地域に居住する65歳以上の高齢者
21	森 他 (2013) <sup>24)</sup>	農村部地域住民における家族構成と首尾一貫感覚との関連	量的研究／横断研究	農村部地域に居住する特定健診受診者
22	小長谷 他 (2013) <sup>25)</sup>	地域在住高齢者の認知機能と社会参加との関連性 社会活動および社会ネットワークを中心として	量的研究／横断研究	ある地域に居住する65歳以上の高齢者
23	竹田 他 (2010) <sup>26)</sup>	地域在住高齢者における認知症を伴う要介護認定の心理社会的危険因子 AGESプロジェクト3年間のコホート研究	量的研究／横断研究	65歳以上の要介護認定を受けていない高齢者
24	神波 他 (2010) <sup>27)</sup>	過疎農村地域に暮らす独居の認知症高齢者のケアについて 福井県I町の訪問調査から	質的研究	地方都市に居住する独居認知症高齢者
25	河野 他 (2009) <sup>28)</sup>	大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題 高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析	質的研究	大都市高層住宅地域と大都市近郊農村地域に居住する独居男性高齢者, 保健医療福祉職および地域住民
26	川崎 他 (2007) <sup>29)</sup>	地域在住高齢者の日常生活行動と介護保険サービス利用状況	量的研究／横断研究	ある地域に居住する65歳以上の高齢者
27	赤嶺, 新城 (2006) <sup>30)</sup>	世帯形態からみた地域在住高齢者の支援 単独世帯に焦点をあてて	量的研究／横断研究	地方都市に居住する65歳以上の高齢者
28	渡辺 他 (2003) <sup>31)</sup>	基本的日常生活動作の自立している地域高齢者の閉じこもり状態像とその関連要因	量的研究／横断研究	地方都市に居住する65歳以上の高齢者

意味内容を表すカテゴリを表した。これらから、地域に居住する独居高齢者の現状と課題を整理し、一覧表にまとめた。

なお、論文の作成にあたっては、分析の過程において老年看護学の研究者2名で議論を行った。また、レビューのクリティーク・チェックシート<sup>34)</sup>を用いて確認を行った。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、公表された文献資料を対象とし、著作権に配慮して引用した。

## Ⅲ 結果

### 1. 地域に居住する独居高齢者に関する研究の動向 (表1)

#### 1) 文献の掲載年別推移

28件の文献における掲載年別の推移は、2003年以降にみられ、年間0～4件であり、2021年の4件が最多であった。

#### 2) 文献の研究デザイン

28件の文献における研究デザインは、量的研究22件、質的研究6件であった。量的研究のうち、横断研究19件、縦断研究3件であった。

#### 3) 文献の研究対象者

28件の文献における研究対象者は、独居高齢者のみを対象にしたもの7件であった。自主グループ等の団体や事業の参加者を対象にしたものは7件、要介護認定を受けていない者を対象にしたものは4件であった。

### 2. 地域に居住する独居高齢者に関する現状と課題

28件の文献から地域に居住する独居高齢者の現状と課題に関する記述として、61コードが抜き出された。コードの類似性と相違性を検討した結果、地域に居住する独居高齢者に関する現状について、32コード、8サブカテゴリ、3カテゴリに分類された。また、地域に居住する独居高齢者に関する課題について、28コード、13サブカテゴリ、5カテゴリに分類された。以下に、地域に居住する独居高齢者に関する現状と課題にわけて、その内容をカテゴリごとに、サブカテゴリ、コードを用いて示す。なお、カテゴリを【】、サブカテゴリを〈〉、コードを「」として表す。

#### 1) 地域に居住する独居高齢者に関する現状 (表2)

##### (1) 【心身の機能の低下】

このカテゴリは、4つのサブカテゴリで構成した。まず、「独居高齢者は、非独居高齢者と比べて、うつ傾向と回答する人が多かった」に表れているように、GDS (Geriatric depression scale) 等を用いて抑うつ傾向が高いことを5コードが示した。特に、男性で顕著であることを示したものがあり、〈地域在住の独居高齢者、特に男性は、抑うつ傾向が高い〉とした。

次に、「独居高齢者は、握力が低く、SMI (skeletal muscle mass index) が低い」に表れているように、骨格筋量指数等を用いて身体機能が低下していることを5コードが示した。歯数が20本未満であったこととの関連を示したものがあり、〈口腔機能を含めて身体機能が低下する〉とした。

さらに、「独居は、不眠症状との相関関係を認める」と表れているように、地域に居住する独居高齢者と不眠症状との関連を1コードが示し、〈不眠症状がある〉とした。

また、「独居世帯群は、夫婦のみ世帯群に比べて、MMSE が有意に低い」に表われているように、MMSE (Mini Mental State Examination) 等を用いて認知機能低下がみられることを2コードが示し、〈認知機能低下がみられる〉とした。

##### (2) 【男性および認知症者がもつ自分らしい暮らし】

このカテゴリは、1つのサブカテゴリで構成した。「一人暮らし男性高齢者を支えている心理・社会的要因は、【生活のなかで見つけた生きがい】であった」に表れているように、男性および認知症をもちながら暮らす独居高齢者は、住み慣れた場所での生きがい・生活時間・自律心等の自分らしい暮らしを持っていることを5コードが示し、〈男性および認知症者は、住み慣れた場所での生きがい・生活時間・自律心をもっている〉とした。

##### (3) 【自主的な参加動機と、住み慣れた場所での支援を得ての社会参加】

このカテゴリは、4つのサブカテゴリで構成した。まず、「一人暮らしの男性高齢者が配偶者と死別後に、食を通じた交流に参加したきっかけと継続していくプロセスには、【ひとり暮らしを支える助け】があった」に表れているように、交流や自主グループに参加する独居高齢者は、参加を支える人を得ていることを9コードが示した。特に、男性はそれによって自分の役割を得ていたことを表していたものがあり、〈交流や自主グループ活動の参加者は、

表2 地域に居住する独居高齢者に関する現状

カテゴリ	サブカテゴリ	論文番号	コード
心身の機能の低下	地域在住の独居高齢者、特に男性は、抑うつ傾向が高い	3	独居高齢者は、非独居高齢者と比べて、うつ傾向と回答する人が多かった
		5	独居世帯群は、夫婦のみ世帯群に比べ、GDSが有意に高い
		9	独居高齢者は、非独居高齢者に比べて、抑うつ傾向が有意に高値であった
		17	独居高齢者は、同居者に比して、GDS-5得点が有意に高値であった
		18	精神的な健康に関与する因子に、「独居」は男性のみ有意な差があった
	口腔機能を含めて身体機能が低下する	4	独居高齢者は、握力が低く、SMI (skeletal muscle mass index) が低い
		5	独居世帯群は、夫婦のみ世帯群に比べ、握力が有意に弱く、ロコモティブシンドローム得点が有意に低い
		9	独居高齢者では、非独居高齢者に比べて、身体機能低下が有意に高い
		20	運動機能は、独居高齢者は有意に低い
		7	歯の数20本未満と関連があった要因に、独居がある
不眠症状がある	14	独居は、不眠症状との相関関係を認める	
認知機能低下がみられる	5	独居世帯群は、夫婦のみ世帯群に比べ、MMSEが有意に低い	
	22	地域在住高齢者において、独居である者は、そうでない者に比して、認知機能低下が有意に認められた	
男性および認知症者がもつ自分らしい暮らし	男性および認知症者は、住み慣れた場所での生きがい・生活時間・自律心をもっている	1	一人暮らし男性高齢者を支えている心理・社会的要因は、【生活のなかで見つけた生きがい】であった
		1	一人暮らし男性高齢者を支えている心理・社会的要因は、【根付いた土地の生活】であった
		1	一人暮らし男性高齢者を支えている心理・社会的要因は、【時間にとらわれない気ままな生活】であった
		24	独居の認知症高齢者が過疎農村地域で暮らすことが続けられた要因は、自宅近くの田畑でやることのできる可能性がある
		25	大都市地域に住む一人暮らし男性高齢者がセルフケアを確立するための強みは、「人の世話になりたくない」「できるだけ一人で頑張りたい」「人に干渉されずに一人で気楽に暮らしたい」という自律心であった
自主的な参加動機と、住み慣れた場所での支援を得ての社会参加	交流や自主グループ活動の参加者は、参加を支える人の存在を得ており、特に男性は自分の役割を得ている	12	一人暮らしの男性高齢者が配偶者と死別後に、食を通じた交流に参加したきっかけと継続していくプロセスには、【ひとり暮らしを支える助け】があった
		12	一人暮らしの男性高齢者が配偶者と死別後に、食を通じた交流に参加したきっかけと継続していくプロセスには【食事と人のぬくもりによるいやし】があった
		15	自主グループ活動に参加する独居高齢者は、【独居活動を継続するための自立への一助】となった
		15	自主グループ活動に参加する独居高齢者は、【独居高齢者の参加を支える存在】に出会った
		15	自主グループ活動に参加する独居高齢者は、【地域住民との交流のひろがり】を楽しんだ
		19	独居男性高齢者が、自主グループ活動に継続参加する理由は、[人との関係性]であった
		19	独居男性高齢者が、自主グループ活動に継続参加する理由は、[自主グループにおける自分の役割]であった
		12	一人暮らしの男性高齢者が配偶者と死別後に、食を通じた交流に参加したきっかけと継続していくプロセスには、【誘いに乗ってみる】があった
	15	自主グループ活動に参加する独居高齢者は、自主グループへ【独居高齢者の自己決定による活動の参加】であった	
	男性および認知症者は、住み慣れた場所での人間関係がある	女性身体活動プログラムで、男性は体調悪化や健康意識の高まりを感じたときに、交流や自主グループ活動への参加動機が生じる	1
24			独居の認知症高齢者が過疎農村地域で暮らすことが続けられた要因は、公私にわたる人間関係があるであった
8			身体活動プログラム参加には、女性では独居であることが有意に関連していた
女性身体活動プログラムで、男性は体調悪化や健康意識の高まりを感じたときに、交流や自主グループ活動への参加動機が生じる		12	一人暮らしの男性高齢者が配偶者と死別後に、食を通じた交流に参加したきっかけと継続していくプロセスには、【立て直しの難しさ】があった
		19	独居男性高齢者が、自主グループ活動に継続参加する理由は「自らの健康意識の高まり」であった

参加を支える人の存在を得ており、特に男性は自分の役割を得ている」とした。

次に、「一人暮らし男性高齢者を支えている心理・社会的要因は、【地域コミュニティの絆】であった」に表れているように、男性および認知症は、住み慣れた地域で築いた絆や公私にわたる人間関係をもっていることを2コードが示し、〈男性および認知症者は、住み慣れた場所での人間関係がある〉とした。

さらに、「身体活動プログラム参加には、女性では独居であることが有意に関連していた」「独居男性高齢者が、自主グループ活動に継続参加する理由は〔自らの健康意識の高まり〕であった」に表れているように、他者との交流や自主グループ活動に参加する動機は男女で異なることを2コードが示し、〈女性は身体活動プログラムで、男性は体調悪化や健康意識の高まりを感じたときに、交流や自主グループ活動への参加動機が生じる〉とした。

## 2) 地域に居住する独居高齢者に関する課題(表3)

### (1) 【運動や地域活動参加による抑うつ傾向の低さ】

このカテゴリは、1つのサブカテゴリで構成した。「男女ともに運動実践していない独居高齢者の抑うつ傾向を基準にし、一人でのみ運動実践している独居高齢者、運動実践していない非独居高齢者、運動を一人でのみ実践している非独居高齢者、運動を他者と実践している非独居高齢者が有意に低値であった」「男女ともに地域活動に参加していない独居高齢者は、地域活動に参加している独居高齢者に比して、抑うつ傾向が高い」に表れているように、ひとりで運動する、あるいは地域活動に参加する地域に居住する独居高齢者の抑うつ傾向が低いことを3コードが示し、〈ひとりでも運動する・地域活動に参加する地域在住の独居高齢者は、抑うつ傾向が低い〉とした。

### (2) 【日常生活能力の評価の相違】

このカテゴリは、3つのサブカテゴリで構成した。まず、「社会的役割において、男性の前期高齢者では単独世帯の得点が有意に低かった」に表れているように〈日常生活活動能力の評価が低い〉とした。一方で、「独居高齢者では、非独居高齢者に比べて、IADL (Instrumental Activities of Daily Living) 能力低下に該当する割合が有意に低かった」等の2コードに表れているように〈日常生活活動能力の評価が高い〉、あるいは、「活動能力指標に関係する因子に、「独居」は有意な差を認めなかった」等の2

コードに表れているように〈日常生活活動能力の評価に差はない〉とした。いずれも老研式活動能力指標を用いているが、地域に居住する独居高齢者の高次の生活機能評価についてばらつきを認めた。

### (3) 【外界とのつながりのありようの不一致】

このカテゴリは、4つのサブカテゴリで構成した。まず、「独居であることの有無と社会活動の程度は、有意な関連がある」に表れているように、地域に居住する独居高齢者は、社会活動や地域活動の参加が少ないことを3コードが示し、〈社会活動や地域活動参加が少なく、閉じこもり傾向にある〉とした。

次に、「地域在住の独居高齢者で、心の理論の二次的信念課題の正解率が高かった人は、社会参加が多い」に表れているように、地域に居住する男性の独居後期高齢者、あるいは認知機能低下のみられない独居高齢者は外出や社会参加が多いことを1コードが示し、〈男性後期高齢者および認知機能低下がみられない者は、外出・社会参加が多い〉とした。

さらに、「閉じこもりは、独居、夫婦世帯間での有意差を認めなかった」に表れているように、地域に居住する独居高齢者における閉じこもりと、夫婦世帯のそれに比して差がないことを示し、〈夫婦世帯と比べて閉じこもりに差がない〉とした。

また、「社会的に孤立であり、かつ意図的に選択した人付き合いをしている『意図的な社会的孤立』の特徴のひとつとして、単独世帯がある」に表れているように、社会的孤立のありようとして、地域に居住する独居高齢者が意図的に選択していることを示し、〈社会的に孤立、かつ意図的に選択した人付き合いをしている者が存在する〉とした。

### (4) 【男性における社会資源活用の異なりからくる住み慣れた場所での暮らしの難しさ】

このカテゴリは、3つのサブカテゴリで構成した。まず、「男性は、独居群が施設入所リスクの増加と有意に関連した」に表れているように、独居高齢者、特に男性において住み慣れた場所からの移動が生じていることを5コードが示し、〈高齢者が住み慣れた場所から変更を余儀なくされる要因に、独居、男性がある〉とした。

次に、「大都市に住む一人暮らし男性高齢者がセルフケアを確立するための対処は、高層住宅地域に居住する者は『能動的に社会資源を利用する』であり、農村地域に居住する者は『受動的に社会資源を利用する』であった」に表れているように、男性独

表3 地域に居住する独居高齢者に関する課題

カテゴリ	サブカテゴリ	論文番号	コード
よる抑うつ傾向の低さ	ひとりでも運動する・地域活動に参加する者は、抑うつ傾向が低い	9	男女ともに運動実践していない独居高齢者の抑うつ傾向を基準にし、一人でのみ運動実践している独居高齢者、運動実践していない非独居高齢者、運動を一人でのみ実践している非独居高齢者、運動を他者と実践している非独居高齢者が有意に低値であった
		9	抑うつ傾向は、運動実践していない独居高齢者と比べて、運動実践している独居高齢者・運動実践していない非独居高齢者・運動実践している非独居高齢者が有意に低値であった
		16	男女ともに地域活動に参加していない独居高齢者は、地域活動に参加している独居高齢者に比して、抑うつ傾向が高い
の日常生活能力の相違	日常生活活動能力の評価が低い	27	社会的役割において、男性の前期高齢者では単独世帯の得点が有意に低い
	日常生活活動能力の評価が高い	9	独居高齢者では、非独居高齢者に比べて、IADL 能力低下に該当する割合が有意に低かった
		26	単独世帯は、高齢者世帯とその他の世帯に比べて、生活活動得点が高かった
	日常生活活動能力の評価に差はない	18	活動能力指標に関係する因子に、「独居」は有意な差を認めなかった
外界とのつながりのありようの不一致	社会活動や地域活動参加が少なく、閉じこもり傾向にある	2	独居であることの有無と社会活動の程度は、有意な関連がある
		20	地域参加では、独居高齢者は非独居高齢者と比較して有意に参加が少ない
		20	閉じこもりは、非独居高齢者に比し、独居高齢者は閉じこもり傾向にある
	男性後期高齢者や認知機能低下がみられない者は、外出・社会参加が多い	10	地域在住の独居高齢者で、心の理論の二次的的信念課題の正解率が高かった人は、社会参加が多い
		27	外出状況において、男性の後期高齢者では単独世帯に「よく外出する/たまに外出する」の割合が有意に高い
	夫婦世帯と比べて閉じこもりに差がない	29	閉じこもりは、独居、夫婦世帯間での有意差を認めなかった
社会的に孤立、かつ意図的に選択した人付き合いをしている者が存在する	6	社会的に孤立であり、かつ意図的に選択した人付き合いをしている「意図的な社会的孤立」の特徴のひとつとして、単独世帯がある	
住み慣れた場所での暮らしの難しさ	高齢者が住み慣れた場所から変更を余儀なくされる要因に、独居、男性がある	11	男性は、独居群が施設入所リスクの増加と有意に関連した
		13	転出を助長させる要因のひとつとして、独居であることに関連があった
		23	独居の者で認知症を伴う要介護認定は、同居者ありの者より有意に多かった
		23	男性においては、独居であることが、認知症を伴う要介護認定と関連する要因のひとつであった
	大都市に居住する男性は、地域によって社会資源の活用の仕方が異なる	1	一人暮らし男性高齢者を支えている心理・社会的要因は、【子との関係性変化の受容】であった
		25	大都市に住む一人暮らし男性高齢者がセルフケアを確立するための対処は、高層住宅地域に居住する者は「能動的に社会資源を利用する」であり、農村地域に居住する者は「受動的に社会資源を利用する」であった
		25	大都市に住む一人暮らし男性高齢者がセルフケアを確立するための弱みは、「健康状態が悪くなった時や孤独死の不安がある」「健康状態がよくない」「安否確認の方法を気にしている」という健康上の不安であった。また、「食事内容が偏っている」「家事を一人でするのが苦労である」という日常生活の維持であった
男性は、健康や日常生活の維持の対応に苦慮している	12	一人暮らしの男性高齢者が配偶者と死別後に、食を通じた交流に参加したきっかけと継続していくプロセスには【迷いと納得のくり返し】があった	
	21	65～74歳の男性独居者は、2世帯同居世帯に比して、SOC 得点が有意に低い傾向を認めた	
27	主観的幸福感において、男性の前期高齢者・後期高齢者とも単独世帯の得点が有意に低い		
あつての認知症者の暮らし	子どもの数が少なく、近くに居住する子どもも少ない	27	子との距離において、独居世帯は他の世帯に比べて「車で30分以内の距離」の近くにいる子どもも少なかった
		27	子の数においては、前期高齢者においては男女とも単独世帯で子の数が少なく、単独世帯と単独以外世帯で有意差がみられた。後期高齢者では、女性において単独世帯で子の数が少なく、単独世帯と単独以外世帯で有意差がみられた
	過疎農村地域で暮らす認知症者は、子どもが近隣に居住する	24	独居の認知症高齢者が過疎農村地域で暮らすことが続けられた要因は、子どもが近隣に居住するである

居高齢者の社会資源の利用には地域によって異なることを示し、〈大都市に居住する男性は、地域によって社会資源の活用の仕方が異なる〉とした。

また、「大都市に住む一人暮らし男性高齢者がセルフケアを確立するための弱みは、『健康状態が悪くなった時や孤独死の不安がある』『健康状態がよくない』『安否確認の方法を気にしている』という健康上の不安であった。また、『食事内容が偏っている』『家事を一人でするのが苦労である』という日常生活の維持であった」に表れているように、男性独居高齢者は、居住地域を問わず健康上の不安や毎日の暮らしの維持に苦慮していることを4コードが示し、〈男性は、健康や日常生活の維持の対応に苦慮している〉とした。

#### (5) 【近隣に居住する子の存在あつての認知症者の暮らし】

このカテゴリは、2つのサブカテゴリで構成した。まず、「子との距離において、独居世帯は他の世帯に比べて『車で30分以内の距離』の近くにいる子も少なかった」に表れているように、地域に居住する独居高齢者は、子が少なく、近くに居住する子も少ないことを2コードが示し、〈子どもの数が少なく、近くに居住する子も少ない〉とした。

また、「独居の認知症高齢者が過疎農村地域で暮らすことが続けられた要因は、子どもが近隣に居住するである」に表れているように、過疎農村地域で暮らす認知症をもつ独居高齢者は、子が近隣に居住していることを示し、〈過疎農村地域で暮らす認知症者は、子どもが近隣に居住する〉とした。

## IV 考察

地域に居住する独居高齢者に関する研究の動向、それらの現状と課題を整理した結果に基づき、今後の研究の方向性、地域に居住する独居高齢者の支援のあり方を考察する。

### 1. 地域に居住する独居高齢者に関する今後の研究の方向性

地域に居住する独居高齢者について、選定された文献総数は28件であった。掲載年別推移は、2003年から発表され、2021年の4件が最多であった。世帯構成割合の推移から、高齢者の単独世帯は1980年には10.7%であったが、2019年には28.8%へと増大していることから<sup>35)</sup>、このような背景とした推移と伺

える。しかし、文献総数が28件にとどまり、そのうち研究対象者が独居高齢者のみに焦点をあてたものは7件であったことから、地域に居住する独居高齢者に関する知見の蓄積が急務である。なかでも、自主グループ等の団体や事業の参加者を対象にしたものは7件であるものの、要介護認定を受けていない者を対象にしたものは4件であり、公的サービスや地域での自主グループ活動等との接点が少ない独居高齢者に焦点をあてて現状を明らかにすることで、住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けるための支援への示唆を得ることができる。

また、研究デザインについて、量的研究22件のうち横断研究が19件であったため、文献中の要因における因果関係を説明することが難しい。そのため、研究デザインの工夫により、地域に居住する独居高齢者の支援につながる要因を明らかにすることが必要である。

### 2. 地域に居住する独居高齢者の現状をふまえた支援のあり方

地域に居住する独居高齢者に関する現状は、3つのカテゴリ、すなわち【心身の機能の低下】【男性および認知症者がもつ自分らしい暮らし】【自主的な参加動機と、住み慣れた場所での支援を得ての社会参加】により構成した。これは、地域に居住する独居高齢者に、老化による心身機能の衰退が生じていることがわかる。しかし、そればかりではなく、男性や認知症者も、住み慣れた場所での生きがいや支えてくれる人の存在等によって社会とのつながりを持ち、これまで得た経験や知恵を携えながら暮らす、衰退と成熟を併存させた高齢者<sup>36)</sup>であることが表れている。

一方で、地域に居住する独居高齢者に関する課題は、5つのカテゴリ、すなわち【運動や地域活動参加による抑うつ傾向の低さ】【日常生活能力の評価の相違】【外界とのつながりのありようの不一致】【男性における社会資源活用の異なりからくる住み慣れた場所での暮らしの難しさ】【近隣に居住する子の存在あつての認知症者の暮らし】により構成した。

このうち、【運動や地域活動参加による抑うつ傾向の低さ】では、抑うつ傾向が運動や地域活動参加によって改善できることを示している。しかし、【日常生活能力の評価の相違】【外界とのつながりのありようの不一致】という課題を鑑みると、運動や



地域活動への参加が難しい独居高齢者の把握とともに、独居高齢者の外出や社会活動、閉じこもり等の外界とのつながりのありようや日常生活能力について実態を把握することで、支援につながると考える。

次に、【男性における社会資源活用の異なりからくる住み慣れた場所での暮らしの難しさ】では、男性独居高齢者が住み慣れた場所で暮らし続けることの難しさが表れている。男性高齢者のなかには、気軽に会話し、相談できるような豊かな人間関係を築くことができず、社会的に孤立している状態にある傾向が強い<sup>37)</sup>。このことから、地域に居住する男性独居高齢者の把握とともに、困りごと等を表出できる関係づくりが求められる。

また、【近隣に居住する子の存在あつての認知症者の暮らし】では、認知症をもちながら独居高齢者が住み慣れた場所で暮らし続けるには、それを支える子あるいは介護者が機能していることが推察できる。2022年の調査結果では、主な介護者は同居の家族が45.9%と一番多く、別居の家族等は11.8%で少ないが<sup>38)</sup>、介護・看護のために離職した者は2017年から増加に転じている<sup>39)</sup>。これらから、認知症をもつ独居高齢者を介護する子、あるいは介護者の負担軽減にむけて取り組む必要がある。

以上のように、地域に居住する独居高齢者に関する現状と課題を整理し、今後の研究の方向性、地域に居住する独居高齢者の支援のあり方を見出した。これらのことに取り組むことにより、地域に居住する独居高齢者が、住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けていくための支援につながると考える。

## V 結語

本研究は、地域に居住する独居高齢者について報告されている28件の文献を概観し、研究の動向、現状と課題を整理して、今後の研究の方向性、地域に居住する独居高齢者の支援についての示唆を得ることを目的にした。独居高齢者が住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けていくための支援のあり方について、以下の結論を得た。

1. 公的サービスや地域での自主グループ活動等との接点が少ない独居高齢者に焦点をあてて現状を明らかにする
2. 運動や地域活動に参加が難しい独居高齢者の把握とともに、独居高齢者の外出や社会活動、閉じ

こもり等の外界とのつながりのありようや日常生活能力について実態を把握する

3. 地域に居住する男性独居高齢者の把握とともに、困りごと等を表出できる関係づくりを行う
4. 認知症をもつ独居高齢者を介護する子、あるいは介護者の負担軽減にむけて取り組む

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 文献

- 1) 厚生労働省. 2022年国民生活基礎調査の概況. 2023. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/02.pdf> [2023.8.1閲覧]
- 2) 水野敏子. 高齢者とその家族への看護. 最新老年看護学 第3版, 水谷信子, 日本看護協会出版会, p.245, 2016.
- 3) 佐藤至英, 戸澤希美. 一人暮らし高齢者のストレス QOL との関係. 北方圏生活福祉研究所年報, 9: pp.39-45, 2003.
- 4) 藤川君江, 林真紀, 上里彰仁. 中山間地域の消滅危惧集落における1人暮らし男性後期高齢者を支える心理・社会的要因. 日本農村医学会雑誌, 70(4): pp.344-353, 2021.
- 5) 佐々木八千代, 白井みどり. 地域在住高齢者の社会活動とJST版活動能力指標の関連. 保健医療社会学論集, 32(1): pp.64-73, 2021.
- 6) 和田あゆみ, 牧迫飛雄馬, 中井雄貴, 他. 地域在住高齢者における社会的フレイルとうつ傾向との関連. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 31(1): pp.11-18, 2021.
- 7) 渡邊観世子, 石坂正大, 原毅, 他. 地域在住高齢者の社会的フレイルの有無と身体機能の特徴. 国際医療福祉大学学会誌, 26(1): pp.80-88, 2021.
- 8) 山下浩平, 上城憲司, 仙波梨沙, 他. 地域在住高齢者の世帯構造別にみた心身機能および生活機能の特徴. 作業療法ジャーナル, 54(7): pp.709-715, 2020.
- 9) 田中真衣, 桂敏樹, 石川信仁他. 中山間地域における社会的孤立高齢者の人付き合いの選択の違いによる新たな類型化 コレスポネンクス分

- 析による特徴の検討. 日本農村医学会雑誌, 68 (6) : pp.773-780, 2020.
- 10) 尚爾華, 野口泰司, 中山佳美. 地域在住女性高齢者における現在歯数20本未満の関連要因 名古屋市体操教室参加者における調査. 口腔衛生学会雑誌, 70 (1) : pp.27-34, 2020.
  - 11) 木原由里子, 樋室伸顕, 尚和里子, 他. Barriers to participation in a physical activity program for the elderly in one area of Hokkaido, Japan. 日本医療大学紀要, 5 : pp.49-55, 2019.
  - 12) 藤井啓介, 藤井悠也, 北濃成樹, 他. 地域在住高齢者における運動実践と抑うつとの関連性 世帯構成および運動仲間の有無に着目した検討. ヘルスプロモーション理学療法研究, 8 (4) : pp.153-162, 2019.
  - 13) 丸田道雄, 田平隆行, 牧迫飛雄馬, 他. 地域在住独居高齢者における心の理論課題成績と社会参加との関連. 老年精神医学雑誌, 30 (2) : pp.177-184, 2019.
  - 14) Takeuchi Miki, Showa Satoko, Kitazawa Kazutoshi, Mori Mitsuru. Living alone is associated with an increased risk of institutionalization in older men: A follow-up study in Hamanaka Town of Hokkaido, Japan. *Geriatrics & Gerontology International*, 18 (6) : pp.867-872, 2018.
  - 15) 生天目禎子, 水野敏子, 坂井志麻. 配偶者と死別したひとり暮らしの男性高齢者が食を通じた交流へ参加したきっかけと継続していくプロセス. 日本在宅ケア学会誌, 22 (1) : pp.74-81, 2018.
  - 16) 中村廣隆, 尾島俊之, 中川雅貴, 他. 地域在住高齢者が転出に至る要因の研究 望まない転出を予防するために. 厚生 の 指 標, 65 (5) : pp.21-26, 2018.
  - 17) 橋本和明, 竹内武昭, 中村祐三, 他. 都市部高齢者の不眠症状とその関連因子. 不眠研究, 2017 : pp.19-23, 2017.
  - 18) 安孫子尚子, 原田小夜. 自主グループ活動に参加する独居高齢者の継続参加への意味づけ. 聖泉看護学研究, 6 : pp.9-18, 2017.
  - 19) 藤井啓介, 北濃成樹, 神藤隆志, 他. 独居高齢者における地域活動への参加と抑うつとの関連性. 理学療法科学, 32 (1) : pp.105-110, 2017.
  - 20) Toyosato Takehiko, Iha Yuuka, Takahara Misuzu, et.al. The moderating effect of spiritual well-being on the association between depressive state and living arrangement in the elderly in rural Okinawa. 民族衛生, 82 (2) : pp.59-72, 2016.
  - 21) 杉浦正士, 早川富博. 高齢者の日常生活状況に 関与する各種要因の解析 (第 I 報) 老研式活動能力指標およびうつ傾向評価に 関与する因子の抽出. 日本農村医学会雑誌, 64 (2) : pp.114-124, 2015.
  - 22) 大嶋佐斗実, 沖中由美. 独居男性高齢者 2 事例の自主グループ活動継続理由 健康意識の高まりと自分の居場所があること. 日本看護学会論文集 在宅看護, 45 : pp.11-14, 2015.
  - 23) 久保温子, 村田伸, 上城憲司. 独居高齢者と非独居高齢者の特徴に関する大規模調査. 厚生 の 指 標, 61 (11) : pp.21-26, 2014.
  - 24) 森浩実, 齊藤功, 江口依里, 他. 農村部地域住民における家族構成と首尾一貫感覚との関連. 厚生 の 指 標, 60 (11) : pp.9-14, 2013.
  - 25) 小長谷陽子, 渡邊智之, 小長谷正明. 地域在住高齢者の認知機能と社会参加との関連性 社会活動および社会ネットワークを中心として. *Dementia Japan*, 27 (1) : pp.81-91, 2013.
  - 26) 竹田徳則, 近藤克則, 平井寛. 地域在住高齢者における認知症を伴う要介護認定の心理社会的危険因子 AGES プロジェクト 3 年間のコホート研究. 日本公衆衛生雑誌, 57 (12) : pp.1054-1065, 2010.
  - 27) 神波幸子, 春見静子, 酒井美和. 過疎農村地域に暮らす独居の認知症高齢者のケアについて 福井県 I 町の訪問調査から. 医療福祉研究, 6 : pp.37-68, 2010.
  - 28) 河野あゆみ, 田高悦子, 岡本双美子, 他. 大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題 高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析. 日本公衆衛生雑誌, 56 (9) : pp.662-673, 2009.
  - 29) 川崎涼子, 森下路子, 中尾理恵子, 他. 地域在住高齢者の日常生活行動と介護保険サービス利用状況. 保健学研究, 20 (1) : pp.49-57, 2007.
  - 30) 赤嶺伊都子, 新城正紀. 世帯形態からみた地域在住高齢者の支援 単独世帯に焦点をあてて.

- 民族衛生, 72 (5) : pp.191-207, 2006.
- 31) 渡辺美鈴, 渡辺丈眞, 松浦尊磨, 他. 基本的日常生活動作の自立している地域高齢者の閉じこもり状態像とその関連要因. 大阪医科大学雑誌, 62 (2) : pp.124-132, 2003.
- 32) 牧本清子. エビデンスに基づく看護実践のためのシステムティックレビュー, 牧本清子, 日本看護協会出版会, 2013.
- 33) 佐伯南々子, 水谷真由美: 地域在住高齢者における社会参加の種類と健康の縦断的関連 文献レビュー. 三重看護学会誌, 25 : pp.1-15, 2023.
- 34) 山川みやえ, 牧本清子. レビューのクリテック・チェックシート. 研究手法別のチェックシートで学ぶ よくわかる看護研究論文のクリテック, 山川みやえ, 牧本清子, 日本看護協会出版会, pp236-237, 2014.
- 35) 北川公子. 超高齢社会と社会保障. 系統看護学講座 専門分野 老年看護学, 北川公子, 医学書院, pp.27-28, 2018.
- 36) 前掲書 2) p.4.
- 37) 斎藤雅茂, 藤原佳典, 小林江里香, 他: 首都圏ベッドタウンにおける世帯構成別にみた孤立高齢者の発現率と特徴. 日本公衆衛生雑誌, 57 (9) : 785-795, 2010.
- 38) 厚生労働省. 2022 (令和4) 年国民生活基礎調査の概況. 2023, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf> [2023.8.1閲覧]
- 39) 総務省統計局. 令和4年就業構造基本調査 結果の概要. <https://www.stat.go.jp/data/shugyou/2022/pdf/kgaiyou.pdf> [2023.8.1閲覧]  
(令和5年9月27日受理)